



落笔
信译

春

松村

風

春浦著

日記

四編

上



櫻雨園主人著

松齋吟光畫

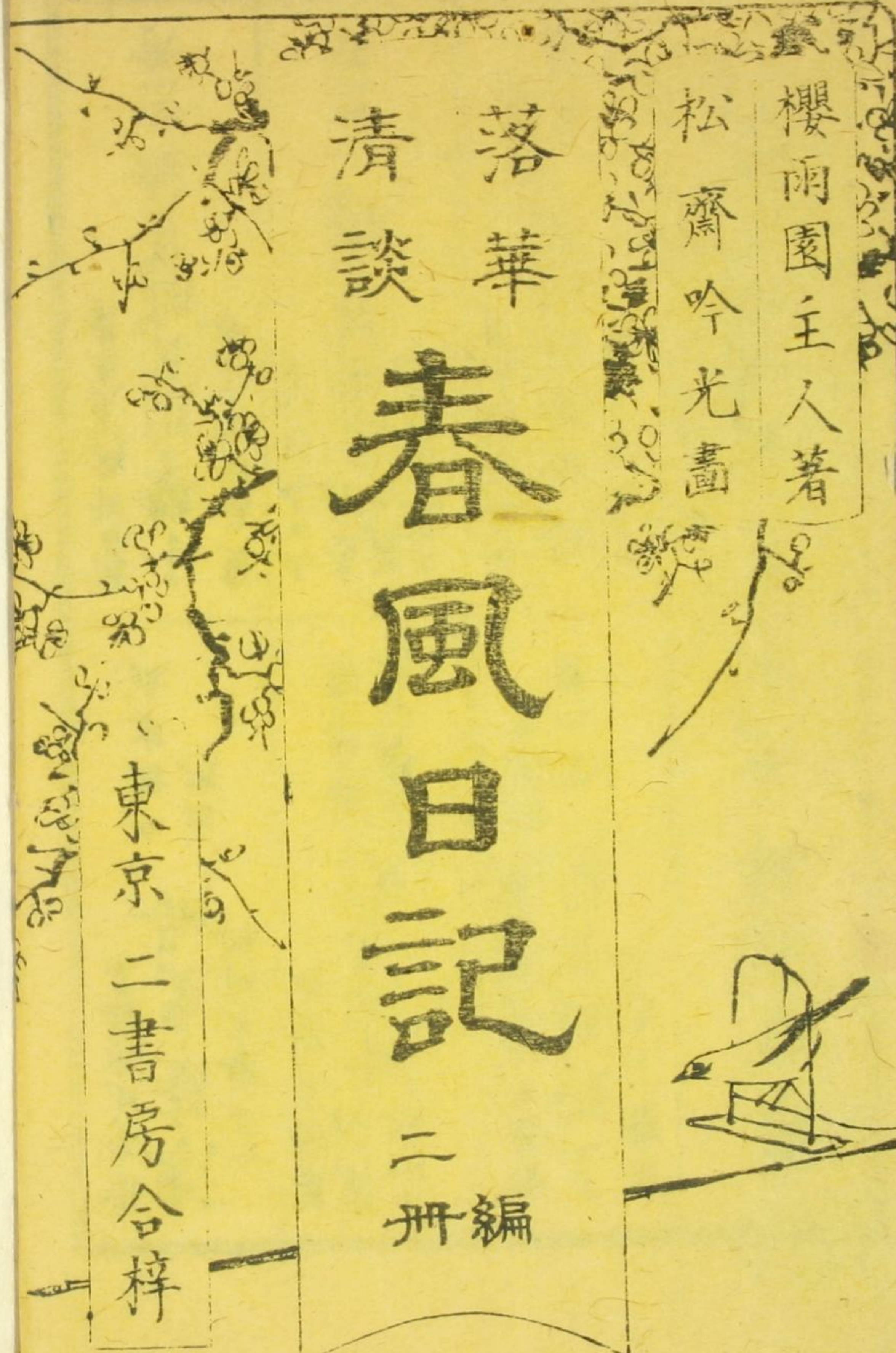
落華

清談

春風日記

二冊編

東京二書房合梓



A517
7

春風日記の編の序

春の風は柔らかなる。梅の香は清らかなる。

花の香は清らかなる。梅の香は清らかなる。

頃夕暮の年。初時鳥は清らかなる。

待春の氷を融かす。空雁の玉音。

多し。想ひを故人を懐く。

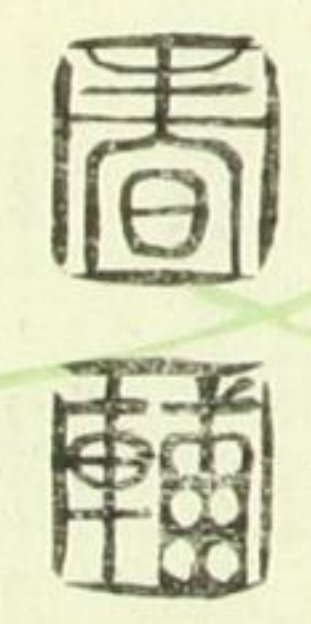
初に積る雲比ぢも。雲を親物ふ
度もせふ。教るものみぢぢの権とせ。
四季の保元と云ふなる道。可成
脚名と云ふ。此巻も。回編ふ。後難
人情世態。行路難一の金とせ。
まご踏も見ぬ。婦知達よ。教へし月

春風四上ロノ一

ふの神老婆の深切。編者や愚痴
ね。野急なりと。必ぶ罵詈雑言
率一勿れせ。云角。

明治十四年九月の物句

春山人 桜雨自題







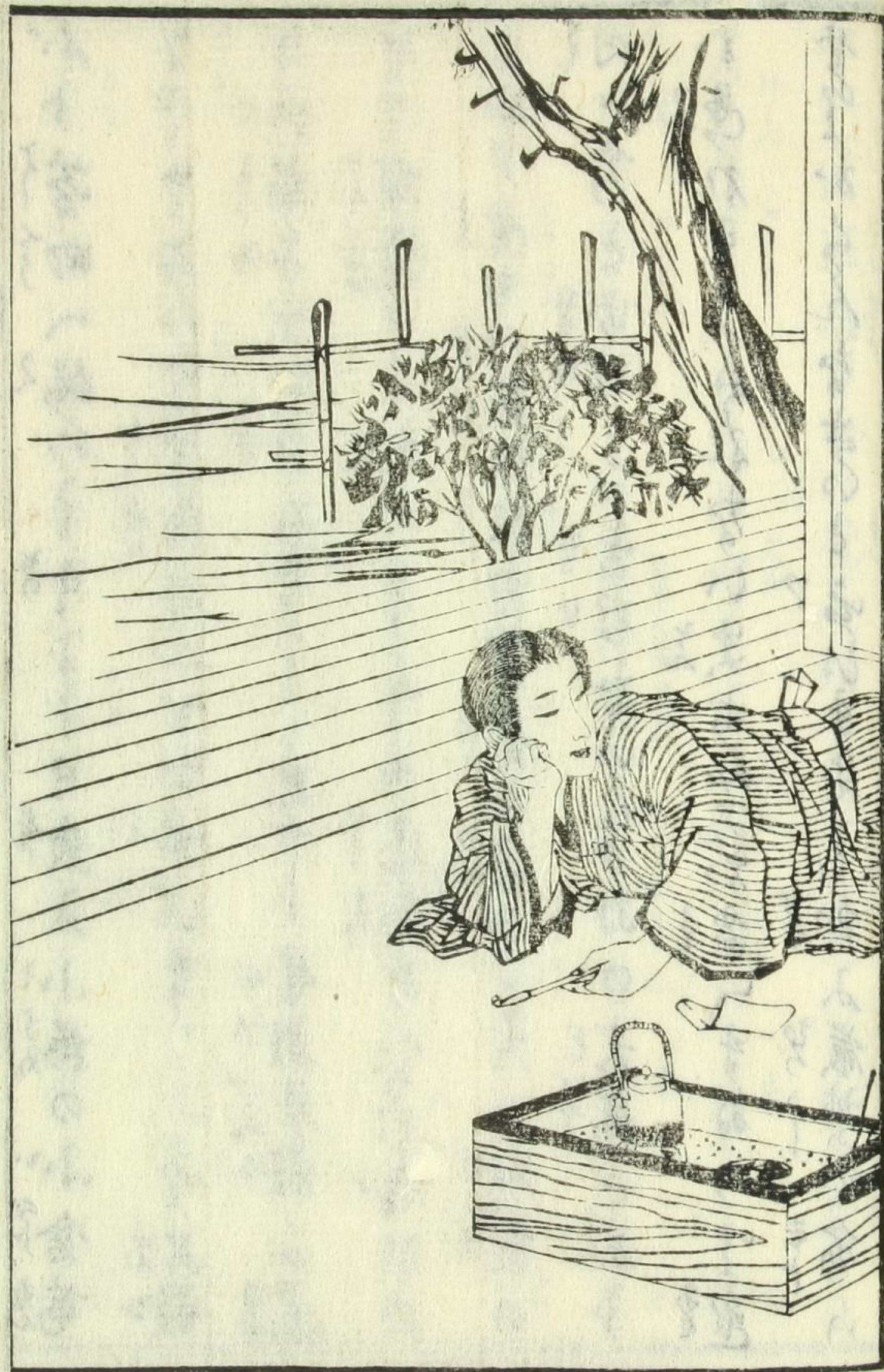
ふ存子来りー其人の別人なりぬるふこれ 堀花由
類よ鳥まつる彼ののよー町ふ々終々の異人と人の
御刺せー藝者の小窓か此種に根引と成りし素人
風俗上品造りのおろりて母を憐れりの茶の庵
堤花か解りの後任花小梅の雲ふ存ぬきそく
ぶりなるー下男の内誰ふ遠慮も内律の吐一の漏る
破れ襖小春の空の暖り記擗ふふ指る鳥影の中目
の魚遊ふ相生の松の櫓をなすもせよ見せし床
き離れ里路ひとめたる 神垣の雲のあんの雲景
ふ系も思そのや夕紅葉社ふ進き道草やまご踏
由見ぬ雲の山鏡りーー兼云も雲よ隔てある
心地しー御ふあし 野霧の晴る二人が姉と春の
笑りや花ふ慮ふぬぬ神の業の白絲の赤繩の端
ぞ懐ー心をーそれでもマア病室が早く癒くおな
なすのまーくぬく何指さう芳町ふ指まーく時長
のお桜むいがかくなくいとおひきまうーく時の影

妻つま一ひとくひとかりかりままししととそれそれちちやや旦那だんな由よし様さまのの心こころをを合あははせせて
ここのの世よににももああららううでで悔くいいふふ事ことををななままのの心こころをを思おもひひままささすす
獨ひとりでで涙なみだがが濡ぬれれままししててどどんんななふふ可か難なんくくななりりままししととああららうう
ああままのの身みとと世よににあありりのの事ことははああままのの心こころをを思おもひひままささすす
ななのの様さまのの心こころをを思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす
ねねのの心こころをを思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす
方かたとと思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす

ややのの心こころをを思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす
云いのの心こころをを思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす
のの心こころをを思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす
カカリリ全ぜん快かいししととキキッットトおおれれをを忘わすれれままししととああららうう
アアヤヤ他た人ひとのの心こころをを思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす
あありりのの心こころをを思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす
のの心こころをを思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす
あありりのの心こころをを思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす
あありりのの心こころをを思おもひひままささすすのの心こころをを思おもひひままささすす

「お花は人々といふ所のぢやアお花の勅せ姉妹と思ひ
了居るのぞが姉妹ぢや此先姉妹さんの中も可憐
がうづの物もねくさ「オヤあんでお入」それ
づつても姉妹で能ひ中もあなりやアまこと入るぢや
ね入内でも身歎と目下もぞそれとも他人と云はれ
るが愛おのり「お」それぢや始めを姉妹ふて置
了まふと他人ふあんで姉妹の中もふるて下さ
ちねく「あ」「吾やちや大栗ふ路向の怪文さう時
ふ久し振り「あ」物ぞか「あ」が最後ふなる
「あ」事由所りぢやふ「あ」中「あ」項中已夢の
思ひ畧すは小倉菫まで答ねてくささうぢや
「あ」時ふの熱気の差「あ」引きが強いので保る
も夢現で夢ひ「あ」東さくろく「あ」覚えなれ候ぢや
「あ」「オヤさうはし「あ」お「あ」梅もお花「あ」想
今算ひ了昨日小廻りたいたので「あ」が昨日の愛
憎か物束が何りま「あ」こので自慰「あ」と思ひな

「お花は人々といふ所のぢやアお花の勅せ姉妹と思ひ
了居るのぞが姉妹ぢや此先姉妹さんの中も可憐
がうづの物もねくさ「オヤあんでお入」それ
づつても姉妹で能ひ中もあなりやアまこと入るぢや
ね入内でも身歎と目下もぞそれとも他人と云はれ
るが愛おのり「お」それぢや始めを姉妹ふて置
了まふと他人ふあんで姉妹の中もふるて下さ
ちねく「あ」「吾やちや大栗ふ路向の怪文さう時
ふ久し振り「あ」物ぞか「あ」が最後ふなる
「あ」事由所りぢやふ「あ」中「あ」項中已夢の
思ひ畧すは小倉菫まで答ねてくささうぢや
「あ」時ふの熱気の差「あ」引きが強いので保る
も夢現で夢ひ「あ」東さくろく「あ」覚えなれ候ぢや
「あ」「オヤさうはし「あ」お「あ」梅もお花「あ」想
今算ひ了昨日小廻りたいたので「あ」が昨日の愛
憎か物束が何りま「あ」こので自慰「あ」と思ひな



解よりの
彼より
福屋
土の重
物本

がら芳町へ解つてきよき日直ふ小梅の小倉菴
まぐまぬの忠助さんやお呼びまうしと長形
の振子やお寄ねまうしながら星形長形小倉
せり頂戴十と彩まうし自由忠助さんがおひの
あやア建中此菴の振子やア菴の家どころの産敷の
内が中とあひるうあひないらぬおの大病とお
お連れまうされないまぢやアおあしおひの
せりからんあさるとおひままとお小菴の御
ないが海濱菴さぬの家があるのをまゆ川免やあ
い今日最良お出の船一の長形へキワトなるし何
時内の都合と一に室内私が芳町までお法と
るわら中時の星形あしお呉れとおおひのぬい
自由本懐をくわへりまうしとアまうしと何時獲
があるうどふとらと毎日お結ちまうしとアサッパリ
忠助さんの善妙法ありませんヨだるふ又善が様
を結ぶならいおら羅幾お時の神彩とと申ふ心お

がら芳町へ解つてきよき日直ふ小梅の小倉菴
まぐまぬの忠助さんやお呼びまうしと長形
の振子やお寄ねまうしながら星形長形小倉
せり頂戴十と彩まうし自由忠助さんがおひの
あやア建中此菴の振子やア菴の家どころの産敷の
内が中とあひるうあひないらぬおの大病とお
お連れまうされないまぢやアおあしおひの
せりからんあさるとおひままとお小菴の御
ないが海濱菴さぬの家があるのをまゆ川免やあ
い今日最良お出の船一の長形へキワトなるし何
時内の都合と一に室内私が芳町までお法と
るわら中時の星形あしお呉れとおおひのぬい
自由本懐をくわへりまうしとアまうしと何時獲
があるうどふとらと毎日お結ちまうしとアサッパリ
忠助さんの善妙法ありませんヨだるふ又善が様
を結ぶならいおら羅幾お時の神彩とと申ふ心お

さぬへ^{しん}ほ^らち^やーたり^き水^え宮^{ぐう}さぬ^つお^ち葉^はを^お影^{かげ}た^る
あま^まー^らヨ^うい^さう^うぬ^くお^めの^の一^んを^ゆ己^の書^のの^病ひ
の^ほく^なら^あく^つち^やあ^らぬ^く程^ご係^一神^はへ^の
無^り程^な以^た影^をお^ける^物ぢ^やぬ^く神^の正^直の^程
ふ^やと^ると^ちふ^事が^ある^から^何で^由正^しく^して
さ^くぬ^やア^終ふ^の能^いる^があ^る物^ごお^めへ^たん^ぞ
の^神仏^やお^集玩^ふる^たら^うヤ^レ那^男の^笑う^情
ま^ふた^りとい^の今^るの^情ま^のモ^ウ忌^ふた^りさ^から
別^れて^いの^トカ^マ具^那私^の是^まを^以影^を掛^と
の^い今^後が^始め^を是^ま今^つお^しう^そん^なる^よと^ある
の^覚え^の何^りま^{せん}ヨ^ウ情^まご^の意^ごの^とそ^ん
な^忌憚^いる^者似^の境^しい^家業^をま^さか^らと^まる
と^皮し^てあ^る事^のた^いの^で是^物と^可憐^さう^な
と^どり^う被^けり^ヨ是^程の^誠ふ^意化^が悪^いぬ^く
受^とも^忌憚^しい^とま^をと^まる^に強^げか^ある^か
ら^サア^お見^せエ^一選^感いと^暇ふ^たの^涙一^下常^橋神

の袖そでふふゆゆききとりとりつつ根ね一一ささくく小こ堤つと花はなのの顔かほをを横よこ
眼め小こ観くわん中ちゆうのの船ふねろろ小こ島しまのの色いろささくく今いま此こゝ姿すがた色いろをを堤つと
花はなのの眼めふふてていい小こ園えんががむむくく一一そそふふははりり一一顔かほもも淡たん色いろのの
旁わらわららぬぬどどもも小こ露つゆのの中ちゆう軍ぐん十じゅう八はち年ねん花はなふふ壁かべてて云いええんんよよのの
来き風かぜ吹ふきき初はつ一一如ごと月げつのの中ちゆう旬じゆん頃ころ一一蓄たくわせせ破やぶ
軍ぐん一一つつるる園えんのの梅うめむむふふ暑あつさををままぎぎりりのの濃のくく白しろ粉こなのの薄うすくく
旅りょけけ一一つつらら仇あだ恨み今いま後あと愁しみいいやや食く一一ゆゆへへりり門かどのの林はやしのの若わかし
縁えん雨あめふふ海うみへへれれ了りやう煩わづらめめるるささぬぬ一一又また一一下した深ふかのの縁えんめめあ

里さと堤つと花はながが魂たまおお守まもりり守まもりり迷まよひひ替か替か時とき見みぬぬれれ了りやう了りやう了りやう
一一がが潮うしほくくまま一一一一等とらのの付つききけけんん小こ島しまのの背せ中ちゆうをを橙だいぢゆう
ををななぐぐ一一小こ島しまおお前まへのの本ほん意いよよおお情なさけ怒いらだののぬぬ堪かん
悲あはししぬぬ一一今いま云いつつのののの嘘うそぶぶくく機き嫌きらをを直ただ一一
ササアア笑わらひひをを見みせせぬぬ一一ナナヨヨヨヨ巴あや馬うまがが涙なみだままるるおおくくササトト云い
ももれれてて小こ島しまのの面おもて磨とぎきき悦よろこばばるる面おもて貌がらみ一一をを一一それそれ
ぢぢやや只ただ那なのの疑うたが惑たぶがが晴はれれ一一ののででままるるぬぬ一一晴はれれるる
所ところッッススッッッッとと晴はれれ渡わたつつ一一見みぢぢやや小こ海うみ道みちをを一一由よし一一トト

勝よ見通しとちみちのサツイまじり茶わいして居る
の考やる日傍りしいぬくあし

第拾四章

忠助も何となく居るのどけい忠助の隣に
居るといふて居るの考やるん
ハ大層着實の言の中うで実情が知りませぬ
動せ馬船のお例も居る方でも程が終ひの
まヨト云ふ所も忠助の次のるより湯沸と蒸茶

お具や携へ静小襪や押置きの入来りへお茶を
おつ入れまゝ今午に職場と片付けを居る
の至極秘密さぬへお茶が遅くなりまゝ下境迄と
小霧お茶や汲でやゝ小霧さん其後のお例
う今日へ行く東流で一時小霧此等芳野の源通
の所へお向ひ参りか掛まゝお尋ねるとおまゝ
さんい吾川の家あやア居たさねくと云ふお
お源通さん小霧と云ふて居る海りまゝ今

中々何所ふお花でのもうま子「オヤさうで〜」と云お
咄〜ふの持入組と案があるのをまがまご島那
あゆお咄〜と志志ののでまきなんごる〜一振ご
お目ふ照つる物ごうお咄〜が海糸ふなりて後ま
せんヨソウだつとぬへおめ人の藝妓と止めこる
の喉通うかの咄しで警いごが金体ご〜この
だ見那が何りて引ひさのちご云つと見りやア
うち解けし咄〜由知朱ぬへかご〜トホ〜そりやア

本意の島那ち持ふお海ねまうまごる由なり
ませんが島那と云ふお名をうりてまよの海に仔細
とゆ〜がありまよのそ私よ由妻〜〜のかりませ
んが荒塔の遠ごらうと若ぐ〜と事がありまよお
らマウを旁のなまのゆうよる〜見えて居るのでまヨ
ハアを島那と云ふのにおま〜と引せ〜と夜更な
〜と東て居るごらうまぢゆアお楽〜みぢね〜おヤ
マアせんを浮製〜い〜のチットもなののでまヨ〜

見^{けん}短^{たん}キツト格^{かく}氣^きまを吐^はくし^しての聲^{こゑ}イ^いま^まあ^あ一^{いつ}十二^に
 さうでもぬくが己^{おれ}書^かふ中^{ちゆう}ヤキツト由^{よし}分^{ぶん}るぬくと甚^{まじ}し
 怒^{おろ}情^{じゆう}あ^あら^らゆるまふぞ小^こ斎^{さい}のま^まこ由^{よし}薬^{やく}を揉^もみつ
 一^{いつ}只^{ただ}短^{たん}キツト吐^はくし^して下^{しも}通^{とほ}り申^{まを}し^しま^まか^から^らマ^マお^お書^き
 なるらひヨキヨツト忠^{ちゆう}助^{すけ}さん^{さん}のま^まら^らた^たの物^{もの}な^なま^まお^お揉^もみ
 ぬか^{ぬか}え^え書^かが^があり^りま^まあ^あら^らう^う動^{どう}ぞ^ぞ寫^{しや}し^して^て一^{いつ}そ^そら^らア^アア^ア
 が^がこ^こう^うモ^モウ^ウ書^から^らり^りヤ^ヤ一^{いつ}こ^こら^らに^に寝^ねる^る燈^{とう}火^かの^の准^{じゆん}儀^ぎ
 み^みわ^わら^らう^うま^まあ^あら^らう^うモ^モ一^{いつ}見^{けん}短^{たん}久^く一^{いつ}振^ふる^るは^は揉^もみ^みす^す入^いふ
 チヨイと一^{いつ}精^{しゆう}に^にと致^{いた}し^しま^まあ^あら^らう^うぬ^ぬく^く一^{いつ}ま^まご^ご飲^{のん}め^めの
 性^よく^くも^もあ^ある^るぬ^ぬか^かが^が素^す語^ご話^わも^も面^{めん}白^{はく}く^くぬ^ぬく^く中^{ちゆう}う^うご^ご動^{どう}り
 あ^あぬ^ぬく^くナ^ナ一^{いつ}ヘ^へイ^い小^こ斎^{さい}さん^{さん}今^{いま}の^の吐^はく^くし^して^て性^よく^くお^お吐^はく^くし^し申^{まを}
 一^{いつ}そ^そら^らぬ^ぬく^く性^よの^のぬ^ぬか^か一^{いつ}お^お忠^{ちゆう}助^{すけ}さん^{さん}ま^まご^ご阿^あん^んな^なら^らふ^ふま^ま
 一^{いつ}お^お揉^もみ^みご^ごう^うら^ら妻^{さい}一^{いつ}お^お吐^はく^くし^して^て致^{いた}し^した^たら^らぬ^ぬく^く見^{けん}短^{たん}
 の^の由^{よし}分^{ぶん}別^{べつ}も^も分^{ぶん}る^る頂^{ちゆう}き^きま^まあ^あら^らう^うヨ^ヨマ^マ一^{いつ}自^じ然^{ぜん}と^とぬ^ぬか^か揉^も
 氣^きの^の揉^もみ^み目^めご^ごぬ^ぬく^くト^ト毛^{もう}よ^より^り小^こ斎^{さい}の^の若^わ川^{せん}一^{いつ}あり^り
 一^{いつ}針^{はり}一^{いつ}む^むも^も根^ねび^びき^きと^とな^なり^り一^{いつ}物^{もの}格^{かく}り^りと^とな^なま^ま由^{よし}織^{オリ}



相^あひ^ひの^の物^{もの}の^の小^この^の病^{びょう}
受^うけ^けの^の病^{びょう}
燈^{とう}の^の病^{びょう}

長ければ観音のよみ 馳きたまはらんを願ふぞめて
聖の概畧をなふ記を

備由小雲の吉川の抱へたり一頃かの露茶の
豪高並木や駒ふおみ深くも思ひ意をれく様
おの子泣や以ていとまろくや小雲の薫く恋
ひるる境花をひたきふ送る一暇をく終ふ遊
合ふ時ありとも人小躰身やほせく一入の心よ
操のなきよ似たり去りと空駒ふ影の波切な

る心の中を驚かす時情けの柵を幾程の責
云延しとも今の只其花よさへなぶざる 協合
せわしの儘も成りたて花をよ告げし身の憂
と解たりとも適きんと遣く茶よ由解く如く
根岩を宿し小梅を澄ひ平くは猶さへ痛め
うど提花の身のうへ其頂の香き病ひふ犯さ
きと體念どあちり見舞さくちみるなふぬふ
菊寒の折りふ近所の待念より庭敷がわくって

を解へ臨めば見えおれぬ大家の花を軍渡五十
のうへ越へて色毎もあはぬ過客風俗まづか
穀のやうまきうへ抜目とてなき取りまの一徳
その本の過客の小意よ向ひ新澤くやうおまへふ
逢のさの今日が初めや軍ふみ是のちない身せも
つる船云ふ事や頼むよの月方の人よ對して
もむとも船べきかけあがらば予よ惹きさう親の
子よぎ
岩屋長たし都合の廻り合せ娘を個の命と救
け三方四方の結解りもおまへ人の心下のあは初
とも自由よなる多ゆへ親の想よはさききかけ
軍儀しるわりさるまのうと云ひ掛けられし流
石の小意もなんと返辭としてよしのやう
のやうまき見えし時の色の急のと云ふゆうな忌憚
なるまのゆるすいと猶よ答ひつる答もふの
軍端も初ね私ふか頼まをさると作志ゆるの
勤な工の存しせんが如きとて
致し

まゝやうかゝるにやあはれしや鬼由角も窺ひたの
と云ふやまき彼通雲の無ひの色と雨子顔しつ
まおらか吐しもうまらうかまくの物も落ち入の
たふゆーや遂げや下さのヨ私の海川中本坊ふ
材本屋の居色屋とて北子の人よ由知
まて者おまへと息負ふあて通ふ並本屋の息子
弱うとや私の娘が見深さかそ是れ並本屋へ
嫁入がしつといつて圓の想ひ様め既ふ大病ふあゆ

なふんとしつや信よ云ふ親白痴ふ了木の並
本屋へ縁燈を去ひ入れけりよ相違速く燈を
置了日柄と撰と嫁入の目と結着て思はせらる弱
う新のどふしこ子や内氣を息子と吹き及び
か空頭より遊ぼうよよ暮るのみう後ふのあま
ふ想ひを掛け坪より町ふ函ふより親の身
ふ入り形く不才姑の息子の嫁よ居己屋の娘や
夢つことそ世の中因くの寝まるまど温風うね

庄中此縁控の影つるが及つて西家の為り
んと並木原の破壊や字き娘のお香の
坊主の底氣となり物つや急ひ孫了今日此頃
のやうまうどの救うべし由思へざればせめて
の假の祝言ありとさせやのたも葉が一命の
賜りも由何んかと當り私が思ふふてある
櫻川善孝は内意を念ませおまへのやうまを撰
つて思ふと何と望むのりる事う物つふい

定む所せまに程よく勸むるゆへに
おまへの深き望むの思ふべしと想ひ付ひ
今日の相控がまへの望むいどんな事でも私
の力お叶わぬ必は相控をやうか
今より藝者や止めぬ
一と違げ目か祝言
まへの身の私か就と
おまへの身は私か就と
おまへの身は私か就と

芳のきりげやうおんと此が分つておる色能の邊
りや交らせおせんとすひつゝ小雲も生質き元
宋賢女まき者おれがわりの鏡しきま業を何時迄
せんのかまゝおど幸ひ是を海り小糸今此時
と得るおりの堤花の分け残るおかけは無ふ
此身と任せんと是より小雲の堤花の子と粧
めばお遊承知の由もなれお早く春月の
家へお掛けの相残と別れ一併の善業より明

日と云はぬ今宵の内ふとわの居る屋々音川
へ待たを逃げつゝお雲お小雲と別き候所よ
小雲お家と續ちお女お相と二個
住居小雲の望みの時ふのそり約つたお義理後も
まを操りま身のうくとなりしお雲もお孫お孫
とこたのいふおたのいふされつゝあや堤花の身と染じ
小橋お雲お由縁のあやあおねお孫とつゞき
あや堤花の可憐お孫お孫つゞきお孫つゞき

